

2001年12月16日

## 中国人類学の本土化現象\*

発表者：河合洋尚\*\*

### はじめに

#### ・ 本土化現象とは？（人類学の場合）

西洋の人類学を一方的に導入していた過去を省みて、中国独自の特徴をもった人類学を創造していこうとする動向。このような動きは、本格的にはここ十年で起き<sup>1)</sup>、現在(2001)もそれは継続している。本土化現象は、人類学だけでなく、社会学や心理学でも起きている<sup>2)</sup>。

#### ・ レジュメの構成

1．現象へ至るまでの過程（中国人類学史）、2．現象への準備（概念整理）、3．現象の動機・指針・内容、4．結び、の四部から成りたつ。本土化現象は、現在進行中であるから、本レジュメは2001年現在までの紹介であることは予め断っておきたい。

#### ・ 日本における研究状況

中国人類学の本土化現象は、日本では紹介されてないばかりでなく、その存在を知る者もほとんどいない。ここ十年ほどの現象ということもあろうが、中国の人類学自体に、日本の人類学者が興味を示さない故と思われる。中国人類学史の紹介ですら、日本では断片的であり、系統的なそれは私の知る限りでは存在しない。そのため、本レジュメにおける現象についての記述は、全て中国の文献に基づいている。私自身の意見は、4．結びでのみ述べた。

## 1．本土化現象に至る過程

本土化現象を紹介する上で、中国人類学の学説史の変遷を見逃すことはできない。現象は、第一に‘90年以前にも潜在的に在り続けたし、第二に過去の中国人類学を踏まえて

---

\* キーワード：本土化、中国人類学、民俗知識、主体性、複眼的分析の先駆

\*\* 東京都立大学社会科学部研究科社会人類学専攻修士1年

1) 西洋人類学導入以降、本土化の動きは常にくすぶり続けていた。

2) こうした潮流は、「中国化」とも呼ばれ、21世紀中国学界の新たな傾向として注目されている。

本土化は、1．研究対象の本土化、2．研究方法の本土化、3．研究者自身の本土化、の三つを意味。

生じているからである。それゆえ、まず、中国人類学の歴史を簡単に紹介していきたい(年譜は資料1を参照)。

	< 中国本土 >	< 台湾 >
紀元	<u>前人類学</u> <sup>5)</sup> ・古代よりの民族に関する記述 甲骨文、『史記』 <sup>6)</sup> 『山海経』 <sup>7)</sup> など	
1900	<u>近代人類学導入前夜</u> ・外国人(鳥居龍蔵ほか)による研究・現地調査 ・進化主義、マルクス主義の紹介	<u>日本植民地時代</u> ・伊納嘉矩らによる研究
1920s	<u>マルクス主義人類学</u> <u>旧中国人類学</u> ・馬恩列斯 <sup>8)</sup> の導入      ・西洋人類学の導入 史的唯物論を基盤 <b>費孝通らの社会調査</b> <sup>9)</sup>	
1949	<u>新中国人類学</u> ・ソ連(共産党思想、民族研究)の影響を受ける。 民族工作 <sup>10)</sup> など <u>応用研究を実施</u> 。文革時に停滞。	<u>台湾における人類学の形成</u> ・日本及び華南中国の人類学 伝統を引き継ぎ形成
1980	「再建」	<u>本土化現象の浮上</u>
1990	<u>本土化現象の実施</u> ・台湾人類学の流れを受け実施。中国は応用研究 の特徴を引き継ぎ本土化。	・本土化現象についての議論 が活発になる。

表：中国人類学のおおまかな流れ

太字は本土化現象に特に関連のある箇所を示す。表は河合作成。

5) 中国で古代より描かれていた民族に関する記述(民族誌)を、近代人類学の前段階として位置づけ、本土化現象で大いに参照した。分類・名称は、王建民(1997)による。

6) 作者である司馬遷は、民族の歴史を記述するため、自ら現地に赴いて調査を行った。彼は、「中国民族学の父」と称される。

7) 中国、東南アジア、中央アジアにおける民族の状況を記述。中国最古の民族資料の宝庫とされる。

8) マルクス(馬克斯)、エンゲルス(恩格斯)、レーニン(列寧)、スターリン(斯大林)を指す。

9) 機能主義やフランス民族学の理論を参照し、社会学的色彩の濃厚な中国独自の調査を実施。本土化現象の先駆といえる。代表者は、費孝通の他、林耀華、凌純声、楊成志、楊 など。

10) 民族識別、少数民族の社会調査などを通し、史的唯物論に基づいた応用研究を実施した。

## 2 . 概念整理

本土化現象そのものの動向を紹介する前に、人類学用語（「民族」）の概念整理<sup>11)</sup>、及び人類学の位置づけと隣接分野との関係について述べていきたい。

### 「民族」の名称と定義

中国人類学では、「民族」の概念を以下のように定義。

- ・民族 nationality を意味。政治的に区切った56民族を指している。
  - ・族群 ethnic group, ethnos, ethnicity を意味。自然発生的な民族を指す。
  - ・国籍 nation を意味。Nationality は民族のほかに国籍の意味ももつため、混乱をさけるために定義づけられた。
  - ・人民 people を意味。「中華民族多元一体論」でいう中華民族を指す。
- これら四概念を整理することで国際的な対応に備えた。

### 「人類学」の位置づけ

民族学・社会学との関係は、以下のように変化

【旧中国人類学期（～‘49）】

アメリカ=イギリス型の分類法（人類学の下に文化人類学、自然人類学、考古学がある）とドイツ=オーストリア型の分類法（民族学と人類学に分けられる）の双方を導入。文化=社会人類学は、民族学や社会学とほとんど区別がなかった。

【新中国人類学期（‘49～‘90）】

ソ連の分類法<sup>12)</sup>に従い、人類学は民族学と生物学に分けられ、学科としてそれぞれの下に位置づけられる。民族学は‘80年代にまで歴史科学に位置づけられていた。民族学は文化=社会人類学と事実上等しく、社会学は別学科として遠ざかっていた<sup>13)</sup>。

【本土化現象以降（‘90～）】 途中段階であるため多少曖昧（論争中）

民族学方面と生物学方面の融合が進み、人類学は双方を含むようになった（語彙の上では、人類学と民族学は同じ）。社会学とも接近<sup>14)</sup>。ただ、学科の上では人類学は社会学の下位項目に設定されている。（社会学は一級学科、人類学は二級学科）

---

11) 台湾中央研究院所属の李亦園によって提起された。

12) ソ連の分類法はドイツのそれと似ているが、ソ連民族学には、「民族学」と「民族研究」の二派がある。

13) 社会学は漢民族の研究を、民族学（文化人類学）は少数民族の研究をすとして区別されていた。

14) 漢民族と少数民族を明確に分けて研究することの限界が提起され、両者は次第に融合に向かった。

### 3 . 本土化現象

#### なぜ本土化現象が生じたのか？

##### 対「西洋中心主義」

**動機**：西洋を中心とした人類学の「世界システム」<sup>15)</sup>において中国が「周辺」の位置にあることを反省し、「学術植民地主義」(何、2000)からの脱却を目指す。

##### 「自己」の強調

**動機**：中国人であるのに、研究・分析の際には西洋の論理でものを考え、自己の内にある中国的な思考・哲学を抑制していることに疑問を感じる(楊・文 1991)。中国人としての「自我」を肯定して、中国的な思考・哲学を前面に押し出すことを提唱。

##### 時代・社会的背景の違い

**動機**：社会科学には時代性があり、進化論、伝播論、機能主義など、西洋人類学もそうした社会的背景に基づき形成された(費、1996)。従って、異なった社会背景にある中国に西洋人類学を一方的に導入することは、非論理、非現実的である。

##### 研究対象の違い

**動機**：中国の人類学は、海外でなく自国の民族を主に扱う傾向にある。故に、研究対象はずっと「複合社会」であり続けた。そのため、「単純社会」の研究より発展してきた西洋人類学を、そのまま適用することができなかつた<sup>16)</sup>。

##### 様々な角度の提供

**意義**：人類学は、社会・文化・経済的な制約を受け形成される。知識社会学的な観点からすれば、西洋人類学でのみの分析は、知識的な拘束を受けてしまう。各国が独自の人類学をもつこと(人類学の相対化)は、様々な視点を提供することにつながり、人類学全体の貢献にもなる。

#### 本土化現象における三つの方針

本土化現象では、以下の三つの方針を掲げている。 **重要**

##### 西洋人類学の積極的導入

西洋人類学の多様な分析法を参照するため、また世界の人類学的傾向に合わせるため、西洋理論の積極的導入を掲げる。西洋理論を一方では模倣し、他方で中国風に修正する。

---

15)「中心」「半周辺」「周辺」の権力関係は、政治・経済だけでなく、人類学にも現れている。そこでは、西洋の人類学が「中心」に、中国・日本の人類学が「周辺」に位置し、「周辺」は一方的に(かつ無意識的に)「中心」の理論・枠組みを受け入れている。

16)特に、無文字で閉じられている社会という像は、もともと中国では成り立ってこなかった(問題は、民族の固定にあり)。故に、クリフォード等の議論は、中国人類学では、さほど重要視されていない。

### 中国の伝統的な民族誌を参照

「前人類学」において書かれた民族誌資料を解読し、その方法論を現代に受け継ごうとする。西洋でない、中国独自の学問的系譜を前面に出し、独自の人類学創造を目指す。

### 人類学の「国際化」

西洋の人類学を積極的に導入（ ）し、中国「伝統」に沿った自身の人類学を創造（ ）した後、両者を統合した「国際」的な人類学をつくりだすことを目標とする。つまり、国際的な流れに合わせ、その上で、中国の特徴を出すのである。

**参照**：西洋人類学と一言で言っても、イギリスにはイギリスの、ドイツにはドイツの特徴がある。これは、各国の学術伝統に乗っかり、人類学を創造してきたからである。究極的には、現在の西洋人類学と同じ立場に立ち、人類学の「世界システム」<sup>16)</sup>の「中心」に移行することを望んでいる。

### **「伝統」の再評価**

「三つの方針」のうち、「西洋人類学の導入」は、現在、積極的に行われているようである<sup>17)</sup>。「国際化」は、それ自体まだ行われていないが、アメリカとの交流<sup>18)</sup>など国際交流は最近とみに盛んである。この動向については、私は、次の三点を紹介したい。

#### 歴史性の重視

「前人類学」期の民族誌、旧中国人類学期における費孝通らの社会調査、新中国人類学期他に見られた応用研究（以上、表で太字にした部分）など、中国独自の特徴をもつと思われる過去の資料・研究が引き継がれる。特に、「前人類学」における民族誌資料が解釈・分析され<sup>19)</sup>、例えば、1．歴史を鑑みる視点が重要であったこと、2．自然科学／文化科学の枠を設けて分析されなかったこと、3．「植物人類学」<sup>20)</sup>など独自の学問領域が発見しうること、が挙げられた。また、歴史を重視することは、西洋に対する対抗の意味も込められている<sup>21)</sup>。

---

17) 最近、西洋人類学の翻訳・紹介が活発になっている。批判人類学については、王銘銘（1997）参照。

18) 例えば、2000年3月にサンフランシスコで開催されたアメリカ応用人類学会では、中国会場が専門に設けられ、好評を得たという。今後も、国際交流の予定は入っている。

19) 「前人類学」の民族誌資料は、「正史」（『史記』に代表）と「地方誌」（『山海経』に代表）におおまかに分けられる。前者からは歴史性の重視が、後者からは自然科学／文化科学の未分離が導き出された。

20) 李時珍の『本草綱目』は「植物人類学」の先駆けだと考えられている。

21) 医学を考えても分かるように、西洋は「科学」的測量を重視する。一方、中国医学（中医）は人々の「経験」から成り立つ。中国には「以史為鏡」の格言があるように、歴史的「経験」を未来に生かそうとする傾向が強かった。本土化現象では、これを伝統的・本質的精神として自ら語り、「科学」への対抗の意も込めて重視する傾向にある。

### 自然科学 / 文化・社会科学の未分離

本土化現象以降の人類学では、人類や民族はひとつの複雑な系統であるから、文化・社会科学的手法だけでなく自然科学的手法も取り入れるべきだという立場をとっている。例えば、最近、雲南で実施されたフィールド調査では、自然科学的手法を取り入れた調査を行っている（詳細は資料2を参照）。また李亦園は、「文化、気、伝統医学」という最近のプロジェクトで、人類学者だけでなく、心理学者、経学者、医者（中医）、舞踏家、物理学者などを集めた。「気」という民俗知識を、自然科学 / 文化科学という西洋枠で区切ることはできないからである。

### 中国概念の使用

西洋概念による分析でなく、中国概念による分析を強調する動きが、見られるようになってきている。例えば、面子(mian zi), 人情(ren qing), 关系(guan xi), 缘分(yuan fen), 家(jia) は、中国社会の重要な特性であるが、これらを西洋の論理で解くことは難しい。そのため、次のような研究が現れることとなった。1. 家(jia)の分析に、「推」や「類」という儒教論理を用いる（麻、1997,1999）, 2. 公と私を対立させる西洋概念は必ずしも中国に適應できないとし、むしろ公と私が結合する中庸の論理をもちだす（費,2001）。こうした研究は、西洋分析法とは異なる、新たな分析法の提示をおこなったものである。

## **応用研究**

大陸側の本土化現象は応用研究の色彩が濃厚である。歴史的に中国の学問が応用・実践を好んできたこと、費孝通などの重鎮が応用研究を重視していることなどが、要因としてあるように考えられる。本土化現象以降、応用研究は以下のように捉えられている。

### 国内民族・地域の「開発」<sup>22)</sup>

少なくとも新中国人類学の時代から、人類学は少数民族の生活水準の向上を、重要な課題として位置づけてきた。マルクス主義の史的唯物論を基盤とし、「未開」を「文明」に導くことを使命としてきたのである。本土化現象以降、単系的進化論の特徴こそ色褪せていったが<sup>23)</sup>、国内民族の生活（及び各民族に結びつく地域）を保護しその水準を上げることは、いまだ重要な課題としてある。

### 現代人類学と応用研究

麻国慶は、現代人類学の盲点として、「超越」の概念、フィールド調査の制約、応用研究の欠乏を挙げている（麻、2001）。<sup>22)</sup>では、人類学が領域を超える学問であるために、自身が曖昧な学問となっていることを指摘。<sup>23)</sup>では、人類者が「閉じた世界」を想定し、その枠内で全体研究してきたことを挙げている<sup>24)</sup>。そのため、応用研究で人

---

22) 生活水準の向上など。マクロには政策科学を掲げマイクロな人類学研究から貢献させる手法をとる。

23) 「人と社会の発展水準はひとつの固定された様式ではありえない」( 、2001) とする論に変わった。

類学の有用性を強調するしか人類学の生き延びる道はないとし、中国では人類学を「政策科学」として掲げた。人類・文化的な問題や開発への参与<sup>25)</sup>を前提とし、異文化理解を行おうとする視点をもつ。応用研究の対象としては、a．地域社会、b．政治制度、c．経済領域、d．教育、e．宗教、f．医学、などが挙げられている。

## 4 . 結び

以上のように中国の本土化現象を概観して気づくことは、人類学の「世界システム」からすれば、日本の人類学も、中国の人類学と同様、周辺的な位置にあるということである。しかし、日本の人類学は、理論だけでなく分析枠まで西洋のそれに従属し、無条件にそれを受け入れている。中国はすでに「本土化」を開始し、自己の立場(=主体性)をつくりあげようとしている。そこから私たちは、何を考え、そして何を学ぶべきであろうか<sup>26)</sup>？

### 参照1：研究の現状

現在、西洋人類学に対する日本人類学の関係を、改めて見直そうという動きがある。

#### 日本人類学の相対化(清水、2001)

人類学とは「西欧人類学」を意味すると未だ欧米の人類学者は考えている。ポストコロニアリズムで西洋中心主義を批判しているにもかかわらず、人類学の権力関係において西洋中心主義が見られるのは矛盾に他ならない。各国の人類学は相対化の可能性がある。

#### 西洋分析枠による現地解釈の限界(浜本、2001)

キドゥルマなる民族語彙は、自然/文化という西洋の分析枠では捉えきれないと主張。ポストモダニズム転回後、人類学は、自己批判から新たなモデルを導き出そうとする傾向にある(あくまで理論でだが)。

### 参照2：今後の進展

私はさらに、先に紹介した中国の本土化現象を参照して、日本の人類学へ提言できそうな項目を、以下二つとりあげてみたい。

#### 民俗知識を西洋の分析枠で捉えることについて 理論面

「気」や「風水」などの民俗知識は複合的であるから、自然科学/文化・社会科学の枠

---

24) 中国でも固定された 族の研究に終始していた。現在は「族際」の観念により解決が図られる。

25) 現在は、西部大開発が、人類学的課題として注目を浴びている。大開発により、各民族の生態環境ならびに「伝統」文化が損なわれないよう、事前調査するといったものである。

26) 私自身は、1．主体性を確立したこと、2．それにより「分析法のオルターナティブ」をもたらしたこと、を本土化の意義とみなしている。それにより、ガダマー等の言う「対話」も成立する。

組みで捉えるには限界がある<sup>27)</sup>。西洋科学の無条件な使用は「中心」による植民地支配であるといえる。中国同様、分析概念を西洋のそれから相対化する努力も必要だろう。権力関係より無条件に西洋科学が分析法として取り入れられていたが、民俗知識の分析には適さない。分析の枠組みを捉えなおす必要性がある。

### 応用研究への視点 実践面

#### 国内研究

日本は中国やアメリカと民族状況が異なるため、民族に対する応用研究が発展する可能性が低い。しかし、地域政策など別の視点から応用研究を模索する可能性も強調していいのではあるまいか。

#### 海外研究

ODAや環境問題などに道が開けるように思われる(以下、話を中国に絞る)。例えば、日本のODAは、中国でどのように使われるべきかまるで把握されておらず、問題となっている。人類学調査により、どのような部分が民族の生活水準向上に役立つか、ある程度把握できるようになるだろう。また、環境問題でも、同様の「草の根からの視点」を応用研究に結びつかせることができる<sup>28)</sup>。

ポストコロニアル転回から自己批判を通し、新たなモデルを模索する段階に今の人類学はきている。だが現時点では、ポストコロニアルの論拠にのっとった「理論」しか提示されていない<sup>29)</sup>。今後は、「実践」を通した理論展開、及び本土化現象に見るような自己の論拠の構築、が必須となってくるだろう。

---

27) 物理学では、還元主義に基づき極度に細分化する西洋の科学が、ゲシュタルト的解析を不可能にさせたことを明らかにした。それゆえ、N・ボーアをはじめとする物理学者は、東洋の民俗知識にゲシュタルト的視点を求めるようになった。しかし人類学では、愚かにも、細分化した西洋科学から、解析できないはずのゲシュタルト的な民俗知識を解析しようとしてきた。この背景には、明らかに、人類学界における西洋の植民地主義的な権力が存在している。無条件に押し付けられる西洋の分析枠から脱却し、新たな分析枠を設定することが今求められよう。そのヒントを、本土化は与えてくれる。

28) 例えば、中国の環境研究は、日中ともに「上からの視点」にとどまっている弱みがある。生活に根ざした「下からの視点」は極端に少ないのだ。マイクロの生活の部分を研究する人類学は、ここに入り込む余地がある。中国の「上からの」環境政策は先進国を上回るほどであるのに、「下からの」政策がまるでなされていないため環境保全が進まないという中国の現状を考えれば、人類学的考察を応用研究に結びつけることは極めて有用であろう。

29) 人類学の「世界システム」から考えれば、ポストコロニアルの論拠にのっとった理論提示は、所詮「周辺」の域から逃れていない。「周辺」部としてではない論理の展開が、特に「実践」を通して求められる。

## 参考文献

### 和文（50音順）

- 内堀基光 1996 「民族の意味論」『岩波人類学講座』 岩波書店
- 桑山敬己 1997 「『現地』の人類学者 - 内外の日本研究を中心に」『民族学研究』61-4
- 栗本英世 2001 「紛争研究と人類学の可能性」『人類学的実践の再構築 - ポストコロナアル転換以降』 世界思想社
- 清水昭俊 2001 「日本の人類学 国際的位置と可能性」『人類学的実践の再構築 ポストコロナアル転換以降』(杉島敬志編) 世界思想社
- 田畑久夫 1997 『民族学者 鳥居龍蔵 - アジア調査の軌跡』 古今書院
- 丹治信春 1997 『クワイン ホーリズムの哲学』 講談社
- 浜本 満 2001 「対比する語りの誤謬 - キドゥルマと神秘的制裁」『人類学的実践の再構築』(杉島敬志編) 世界思想社
- 丸山高司 1997 『ガダマー 地平の融合』 講談社

### 中文（拼音順）

- 巴 博德 1988 『经历·见解·反思—费孝通教授答客问』 北京市新闻出版局
- 曹 树基 1999 「中国村落研究的东西方对话」『中国社会科学』 新闻出版
- 费 孝通 2000 『21世纪人类学面临的新挑战』 广西民族学院学报 第22卷第5期
- 费 孝通 2001 『师承·补课·治学』 三联书店
- 顾 定国 2000 『中国人类学逸史』(胡鸿保·周燕译) 社会科学文献出版会  
[G.E.Guldin 1994 “The saga of Anthropology in China”]
- 郭 于华 1997 「人类学者的困惑」『读书』(1997.9) 生活·读书·三联书店出版
- 郝 时远 2001 「人类学和民族学」『21世纪中国人文社会科学展望』(裴长洪·刘迎秋主编) 中国社会科学出版会
- 何 明 2001 「民族学田野调查新方法的探索与实践」云南民族村寨调查—跨世纪的思考』(高发元主编) 云南大学出版社
- 和 少英 1997 『社会—文化人类学初探』 云南民族出版社
- 何 星亮 2000 「论人类学的本土化与国际化」 广西民族学院学报 第22卷第1期
- 胡 鸿保 2001 「从学术传统看中国人类学的新格局」『人类学理论的新格局』(纳日碧力戈等著) 社会科学文献出版
- 胡 鸿保 2001 「近年社会文化人类学若干热点透视」『民族研究』(第1期, 跟王建民共著)
- 李 亦园 1998 「人类学本土化之我见」 广西民族学院学报
- 麻 国庆 1997 「民间概念」『读书』(1997.8) 生活·读书·新知三联书店出版

- 麻 国庆 2001 「人类学：理解与应用」『人类学理论的新格局』（纳日碧力戈等著）社会科学文献出版会
- 纳日碧力戈 1997 「隐喻的规则」『读书』（1997.9）生活·读书·三联书店出版
- 欧 潮泉 1999 『基础民族学 - 理论·人种·文化』 贵州人民出版社
- 宋 蜀华 1999 「民族学的应用与中国民族地区现代化」『社会学科的应用与中国现代化』（乔建·李沛良·马戎主编）北京大学出版社
- 孙 庆忠 2001 『《广东族群与区域文化研究》评析』 中国社会科学院
- 王 建民 1997 『中国民族学史 上卷』 云南教育出版社
- 王 建民 1998 『中国民族学史 下卷』 云南教育出版社
- 王 铭铭 1997 「体验·自觉」『读书』（1997.9）生活·读书·新知三联书店出版
- 熊 锡元 1998 「在新时期少数民族社会调查中增加 民族素质 项目的建设」『云南民族村寨调查 - 走进田野』（高发元主编,2001年）云南大学出版社
- 赵 丙样 2000 「从族际角度理解多民族的中国社会与文化」 广西民族学院学报 第22卷第1期 （跟周星对话）
- 周星 他 1998 「人类学本土化与田野调查 - 元江调查四人谈」（跟胡鸿保，刘援朝，陈丁昆共同） 广西民族学院学报
- 肖迎 编 2001 『云南民族村寨调查 - 傣傣族』（高发元主编）云南大学出版社

## 年譜

- 1926 : 蔡元培 (cai yuan pei) が『説民族学』を書き、民族学を紹介。近代中国人類学の幕明けと考えられている。
- 1928 : 郭沫若 (guo mo ruo) が歴史唯物論 (主にモルガン理論) に基づき、『中国古代社会研究』を書く。出版は、1930年。
- 30s : アメリカの文化歴史学派が中国に伝入しはじめる (ローウィー、ウィッスラー、ボアズなどの翻訳)。また同時期、フランス民族学も伝入。後者の代表者として、楊 (yang kun) 凌純声 (lian chun sheng) 楊成志 (yang chen zhi) 等がいる。彼らは、少数民族の現地調査をも行う。
- 34前 : この頃までに、北京大学、清華大学、中山大学、同済大学などで、文化人類学 (民族学) の課程が設立される。
- 1934 : 中央大学社会系に、文化人類学や、中国民族文化を設立 (秋)。中国民族学会が成立。(冬)
- 1935 : ラドクリフ = ブラウンが燕京大学社会系に来中 (10月)。功能学派 (機能主義) が伝わる。
- 1936 : 呉文藻 (wu wen zao) がマリノフスキーと会見。ロンドンにて。呉は、中心人物として、機能主義を広める。また、彼の弟子、費孝通 (fei xiao tong) や、林耀華 (lin yao hua) も、機能主義に基づく調査・研究を行う。  
: 北京大、清華大、輔仁大、中法大、華西大、中山大、中央大、復旦大、同済大、金陵大、雲南大などが、前後して学科を設ける。
- 1947 : 清華大に人類学系が成立。西洋人類学の教材が主だった。
- 1949 : 解放 (中華人民共和国の成立)。民族識別工作始まる。
- 50 ~ ; 中国共産党の指導下で、多くの民族工作者 (人類学者含む) が、全国の各少数民族地区において、調査・研究を実施。指導者として、李維漢 (li wei han)、楊静仁 (yang jing ren) 等がいる。実践の中で、新中国民族学が発展、成立していった。旧ソ連の分類法をひっぱり、民族共同体の研究を始めだしたのも特徴。民族学が、歴史科学に位置づけられた。
- 1951 : 中央民族学院、西南民族学院、西北民族学院、貴州民族学院、広西民族学院、雲南民族学院など、各民族学院が相次いで創設。民族問題や民族状況の専門研究を行った。その研究仔細は、政治、経済、文化、習俗、宗教、社会階級、民族関係、歴史である。
- 1953 : 学院の整備が進んでいたさなか、社会科学は「偽科学」として撤去。一時衰退する。
- 1956 : 中央民族学院歴史系に、民族学専攻が設置される。モスクワ大から、H.H. チェボクサルフが招聘され、「民族学基礎」、「原始文化史」、「歴史民族学」を講義。

- 61 : 1956年から61年の5年間に、最大規模の民族工作が実施される。16の省の民族調査隊が、少数民族の社会歴史調査を進行。「三套叢書」(簡史、簡誌、自治地方概況)をまとめた。調査報告の整理も行う。収集した第一次資料の量は空前のものとなる。
- 1957 : 「大躍進」政策が施行。ソ連民族学の輸入から、中国共産党の特性を前面に押し出した「毛沢東化」が進む。
- 60s : 文化大革命が行われる。文革中は、全国の民族機構が撤去。各民族学院も停止させられた。このとき、民族学は、「修正主義」として「禁区」にあげられる。
- 1976 : 「四人組」逮捕。文革が終了する。人類学が回復に向かう。
- 1978 : 民族学が社会科学発展の重点学科として正式にとりあげられた。
- 1979 : 民族研究工作規則の会議が開催。また、中国民族研究会が成立し、中国民族研究会準備委員会が下設された(いずれも昆明において)。  
: 中央社会科学院が民族研究所を設立し、民族学、民族史、民族理論、民族関係、民族言語、及び世界民族研究室を開設した。その後、四川、貴州、雲南、甘肅、新疆、内モンゴル、吉林、湖南、青海、広東、広西などに民族研究所が設立。民族研究工作がさらに重視されるようになった。
- 70末 : 『ソ連大百科全書』が出版。民族学が社会科学に位置づけられる。以後、社会学「重建」の議論が持ち出され、人類学と社会学が接近。
- 1980 : 第一次中国民族研究会が実施(貴陽)。討論の中心テーマは、「民族学研究の対象と任務」であった。ここで、民族学が社会科学であると認識。従来は、エンゲルスの「およそ自然科学でない科学はすべて歴史科学である」という観点から、歴史科学とされていた。
- 80s : 香港と台湾の学会で、社会科学の中国化の問題が提起されだす。また大陸でも、費孝通のもと、中国化の議論が始まる。
- 1982 : 第二次中国民族研究会が実施(西寧)。討論の中心テーマは「民族学と現代化建設」であった。
- 1983 : 林耀華の提言で、中央民族学院が民族学系を創設。中山大学に人類学が成立した他、アモイ大学、遼寧大学、広西民族学院、雲南民族学院なども、前後して民族学専攻を設立した。民族学(人類学)を創設する大学は次第に多くなってきた。
- 1984 : 第三次中国民族研究会が実施(南寧)。テーマは、紀要『起源』についてであった。
- 1987 : 国家社会科学基金の援助を得て、『中国人類学の建設』についての課題が推進。
- 1989 : 第四次中国民族研究会が実施(北京)。討論の中心テーマは「伝統文化と民族の発展・繁栄」であった。
- 1991 : 『社会および行為科学研究の中国化』(楊国枢・文崇一)が出版。本土化が具体的に起こる。

- 90s : 台湾、香港、中国本土で本土化の議論がなされ、指針が定められる。主要指導者は、費孝通、李亦園 (li yi yuan)、周星 (zhou xin) など。本土化に基づいた実地調査も盛んになる。
- 1998 : 本土化理論を基盤とし、雲南25少数民族のフィールド調査が実施。成果は、『雲南民族村寨調査』シリーズ (全27巻; 高焄元主編, 2001) にまとめられる。
- 2000 : サンフランシスコで開催されたアメリカ応用人類学会に、中国社会科学院が参加。国際交流の深化の兆しがみえる。
- 2000 : 「国際人類学と民族学連合会2000年中期大会」が開催される。

